

(目的) 手指の巧緻性の優劣は、手指の運動機能性にとどまらず、集団活動での取り組みや心理面にも影響を与えているといわれている。第2報では、「糸結びテスト」の成績と生活面の実態および性格との関連を調査し、手指の巧緻性を高めることの意義について考察した。

(方法) 調査対象および時期は第1報と同じである。質問紙調査にひき続き、「糸結びテスト」を実施し、双方を同時に回収した。調査内容は、属性、性格、教科に対する関心と家庭での手伝い等の実践状況、手指を使う遊びや作業への自信などである。「糸結び」の結び目数の多い人(平均値 $+\sigma$ 以上、上位群と呼ぶ)と少ない人(平均値 $-\sigma$ 以下、下位群と呼ぶ)に分けて分析し、2集団の結果を比較した。

(結果と考察) 性格に関しては、糸結び成績の下位群は、「神経質」、「自己不信」の傾向があるのに対し、上位群は「協調性」があることが示され性格的な差異があることが明らかとなった。上位群は、日常生活の中でも手指を使う家庭での手伝いを良くやり、家庭科に関する関心も高い傾向がみられ、手指を使う遊びや作業に対する自信についても高いことが示された。以上のことは、低学年および男子においてその差が顕著であった。下位群は手指を使う活動が不得意で、それらの活動に対し消極的な傾向を示し、これがまた手指の巧緻性の発達を停滞させる原因となることが伺えた。手指の巧緻性が性格形成に影響を与えることから、手先の器用さを向上させる教科内容を導入する意義が大きいことが考察された。